

# 伊部正之教授の人と学問

清水修二

アパートヘイト研究や社会政策研究などを含む伊部先生の学問的業績の全体について私は語る資格をもたない。私にとっては岩手県釜石市に関する総合的な調査が伊部先生との最初の共同作業であったと思う。その後、松川資料関係で一緒に仕事をする巡り合わせになった。ここではもっぱら松川資料の事業にかかわって私が知る限りの伊部先生の仕事ぶりとお人柄について語ることで責めをふさぎたい。

伊部先生にとってはおそらく、福島大学での研究生活の後半の大部分をこの松川資料の事業が占めることになったと思う。松川資料の収集・整理は、福島大学が松川事件の現場近くに統合移転したことを契機に吉原泰助学部長のとき経済学部の事業としてスタートした(1984年)。戦後史に一大転機をもたらした松川事件、ならびに戦後民主主義運動の金字塔と言われる松川運動の関連資料を、現場に近い本学に収集するというのは非常にすぐれた着眼であったと思う。ただ事業をスタートさせた段階では、これが以後20数年にもわたる大事業になるとまでは誰も予想していなかったのではなかろうか。しかもそれを伊部先生が一身に背負っていかれることになるとは、先生ご自身にもまったく予想外であったと拝察する。

私自身は、学部で発足した「松川資料研究会」の一員になりながら1988年の松川資料室の開設以後は次第に事業から縁遠くなってしまい、『松川事件五〇年』の出版(1999年)に携わったことを除けばほとんどノータッチの状態になって今日に至っている。伊部先生にいわせればしんどい作業から敵前逃亡した脱走兵にほかならないわけで、銃殺に値する戦犯である。したがって松川資料についてもっともらしい顔で語るのは忸怩たる思いがともなう次第だが、勇を鼓して松川資料収集・整理の性格と意義について少々述べてみる。

松川事件関係の資料を集めるのはかなり特異な性格をもった作業であるということ、私も参加してから暫くで知ることになった。松川事件、松川裁判そして松川運動にかかわった人々は全国に数多く存命中であり、それらの人々にとって事件や運動の記憶はなお鮮明なばかりでなく、それはそれぞれの人生においてかけがえのない体験の記憶である。そして多くの人々が、「松川の教訓」を忘れてはならぬ、後世に伝えなければならぬとの強い思いをもって資料の収集に協力を惜しまないでいる。したがって松川資料の収集は人的なつながりに依拠しつつ進められるべき、すぐれて人間的な作業になる必然性をもっていた。アカデミックな関心だけではなかなか実を結ばない事業だということである。

松川資料はそのような「思い」に支えられているがゆえに、それ自体が、今なお脈々と生きている「松川運動」の中に位置づけられているとも言える。松川事件からすでに60年近くが経過したが依然として世に冤罪の種は尽きない。刑事事件の報道に関してマスコミのあり方が問わ

れるような事件も後を絶たない。他方で、かつて松川運動という形で大きく盛り上がった人権擁護と民主主義運動の国民的エネルギーは最近はどこへ行ってしまったのかという嘆きの声もある。今日「松川を語る」ことの意義がどこに存するのかについては今後も絶えず問い直し続けなければならないだろう。

ともあれ松川資料に関係する人々は多かれ少なかれ「松川運動の精神」の体現者であるといえる。そして松川資料そのものがこのようにきわめて人間的であり、人的な関係の中で「生きている」ものであるために、収集・整理の事業もたいへん人間くさいものになる。したがってその収集・整理を担う人物のパーソナリティが決定的な意味をもつ必然性があったといえよう。その点、伊部教授という「人」を得たことは松川資料ならびに松川運動関係者にとってはたいへん幸運な巡り合わせであったと思う。しかしその半面で伊部先生ご自身にとってこのことは、過大な負担を背負いこむという、ある意味では大きな犠牲を強いられる結果になったことは否定できない。

伊部先生の人柄について1つだけ申し上げれば、その性格の特徴は良い意味でも悪い意味でも「限度を知らない」という点である。一例を挙げるなら『松川事件五〇年』は私が編集を担当することになった出版物だが、困ったことに伊部先生のお書きになった原稿の分量は制限枚数の実に4倍に及んでいた。「コンパクトにまとめるのも研究者の能力です」と言って編集者の立場から原稿を半分削るよう求めた次第だが、原稿を読んだ出版社社長が内容が素晴らしいので削るに忍びないと「天の声」を下したのでそのまま活字になり、本のボリュームも結構なものになった。

ご自分のお書きになる文章へのこだわりは伊部先生の場合は相当なものがあり、活字になったあとで何度も正誤表を作成される。内容的にも厳密を期することは一通りでなく、たとえば松川事件に先立って発生した庭坂事件に関して、奥羽本線の蒸気機関車がトンネルを通過するときに煙が機関室に流れ込むのを避けるために前後逆向きに連結されていたといったような事実を、事実である以上は書かないわけにはいかないということできちんとお書きになる。原稿が長くなるのも道理である。

松川資料室に足を踏み入れてみると資料が実に整然と整理され陳列されているので、一見ただけでは伊部先生がどれほどの作業をこれまで積み重ねてこられたか感じ取ることがむずかしい。しかし雑誌記事のファイル1つでも手にとって吟味してみればそれが細心の注意を払って非常に丁寧に作られていることが分かる。たとえば雑誌や書物を開いてコピーし袋綴じにすると、現物では右にあったページが複製品では左になってしまうので、コピーしたものをわざわざ台紙に切り貼りして左右を調整し現物通りの形に復元する。しかもコピーの際につく汚れをいちいち修正液で消す作業まで怠らない。

書簡のたぐいについても作業は大変である。葉書や封書の消印が読めないときは内容から推して発信の時期を特定しなければならない。発信者の名前について知識があるかどうかで整理の水準は当然かなり違ってくる。ただ単に細かい作業をこなすマメな性格であるというだけでは、もちろんこのようなレベルの高い仕事はできない。飛び抜けた記憶力と集中力、そして数多くの人たちとの濃密な人的関係を形成するだけの人間の魅力があって初めてなしうる業である。

私などは根が俗物にできあがっているから、何か仕事をする場合でも「どの辺までやるか」という線引きを常に意識してしまう。しかし伊部先生は常人が「そこまでやらなくても」と思うところ

までどんどん踏み込んで行ってとどまるところを知らない。

この非妥協的な性格は明らかに伊部先生の長所であり研究者としてのすぐれた資質を表すものだが、半面でこうした徹底・潔癖主義が周囲の者をして「ついて行けない」との思いを抱かせる結果につながったこともまた否定できない。松川資料の事業では人脈というものが決定的な意味をもつだけに、結果的に人的情報が伊部先生個人にあまりにも集中しすぎて回りからはあたかもブラックボックスのような状態になってしまっているのは残念な事態である。松川運動記念会など学外における松川関係者との人脈形成は伊部先生によって見事なまでになされたけれども、大学内での協働関係の構築は遺憾ながらうまくなされなかったと言わなければならない。

松川資料の収集整理の仕事は伊部教授の献身的な努力を抜きに語り得ないが、福島大学としてはいつまでも先生個人に「おんぶにだっこ」状態では済まない。松川資料が福島大学に存在することの学術的ないし社会的意味に関しては大学のスタッフの中ですら十分な認識があるとは言えない。また学生教育にそれが大いに活用されているかといえきわめて不十分なのが現状である。松川資料を福島大学の真の共有財産にするために取り組まなければならない課題は少なくない。

資料の収集・整理というような仕事は、苦労が多い割に個人の業績としては相応な評価を得にくいものだろうと思われる。福島大学には常磐炭坑資料という膨大なコレクションがあり、第1次整理だけでも30年以上の日時を費やして多くのスタッフがその整理作業にエネルギーを割いてきたが、実際にこれを研究対象として学術的な業績に結びつけた例はきわめて少ない。(伊部先生の論文「常磐炭礦礦員に関する一覽書―『礦員カード』が示すその若干の特徴―」1982はその数少ないものの1つである。)個人の業績に直結しないような作業に時間を割くことを研究者はあまり望まないのが普通である。しかし実際には学術資料の収集・整理は多くの研究者にとっての学術インフラの建設ともいべき貴重な仕事であり、それがあって初めて科学的な実証研究が可能になる。

松川資料については幸いにもこれを利用していくつも著書や論文が著されてきている。伊部先生ご自身もいくつかの著書・論文を物しておられる。思うに松川事件に関する先生の業績は、松川事件を平事件や三鷹事件など一連の政治的刑事事件全体の中で位置づけ、事件がこの福島で発生することになった必然性を戦後の労働運動史の問題として明らかにしたところに存するのではないかと私は思っている。戦前戦後を通じてしばしば仕組まれた「権力による謀略」というものの実像をリアルに描き出した点でもたいへん興味深い。日本現代史研究としてユニークな達成と言っているのではないだろうか。これまでの膨大な作業を土壌にして、先生が今後いっそう稔り多い収穫の時期を迎えられることを願ってやまない。

伊部先生は定年退職されるが、先生が心血を注いで育て上げてきた松川資料室は少なくともまだ暫くは伊部先生を必要としている。資料の収集はまだ続いており完全な目録の完成にはまだ時間がかかるということである。「松川資料目録」は数百ページにも及ぶ画期的な作品になると推測される。

松川資料室には毎年学外からたくさんの人々が訪れ、福島大学の学術資料のなかでは抜群に活用度が高い。法学的な面や社会運動的な面などから学問的な研究素材としてまだまだ大きな存在意義をもっているといわれている。また教育的な面からみても紛れもなく貴重な教材である。松川資料室が最終的な完成形態に至る日を楽しみに待ちたい。もちろん、誰にもましてそれを願っているのは伊部先生ご自身であるに違いない。

松川の仕事に献身される中で伊部先生はご健康をも少なからず犠牲にされたようである。くれぐれもご自愛されるよう切に願いつつ、つたない筆を擱くこととする。(2007.1.2)